熊日1968.05.11

水俣病は叫ぶ

(15)

市民の二重構造(下)

〝工場の君臨〟に問題

無反応な市民にさせる

水俣市で「会社に勤めている」と言えば、それはチッソ株式会社に勤めていることを意味する。他の会社は、水俣市では会社の部類に入らない。チッソが市民の上に君臨していたなごりである。

同じように、戦前大牟田市では三井関係の会社に勤めている人を〝三井のお役人さん〟という尊称で呼び、一般市民の〝町方〟と区別していた。いまは〝三井さん〟と、平易な呼び方になったが、三井のホワイトカラー族と町方との二重構造は、水俣市でのチッソ職員と一般市民の関係以上にはっきりしている。「三井の社員と言えば、知らぬバーでもツケがきく」といわれるほど、三井の社員は大牟田では羽振りがいい。

大牟田市は三井資本の〝植民地〟である。明治二十一年、三池炭鉱が官営から三井の経営に移された当時、大牟田は人口一万人そこそこの町だった。それがいまでは、十九万人の工都、〝三井の町〟となった。

「祖先伝来大牟田の人間だという人はほとんどいません。三井各社の職員も労務者も町方も、大半、はよそから来た人で、いわば寄り合い世帯。その中で三井の職員がエリートなのです」大牟田市役所で聞いた話だ。

水俣市では、チッソと一般市民の二重構造の中で、人命無視の水俣病が起きた。寄り合い世帯の大牟田市には、三井さんと町方との、もっとはっきりした断層がある。三十八年十一月の三井三川鉱の炭じん爆発(保安の手落ちによるもので死者四百五十八人、CO患者八百数十人)は、この断層の中で発生した惨劇だった。

その大牟田市で、いま大牟田川の水銀汚染が問題になっている。この企画ですでに紹介したように、久留米大学公衆衛生学教室の山口誠哉教授らによって警告も出されている。「にもかかわらず、市民は大牟田川の汚染についてはとんど苦情を言いません。川の水のニオイが激しい時とか、目にしみる時などに、年間五件ぐらいの苦情があるだけです」――市の担当者はそう言った。

不思議なほどの、市民の無反応ぶりだ。その原因を解く必要がある。市の担当者は「市民は、大牟田川はきたないものだとあきらめている。それと、三井さんがやること(汚染したこと)だから、よかたい、よかたい、という市民感情がある」と説明した。

水俣では「チッソあっての水俣」という声を聞いた。大牟田では「三井あっての大牟田」である。だがしかし、工場が市民の上に君臨するところで、往々にして悲惨な公害、事故が発生している。

新潟水俣病についても、同じことが言える。

新潟水俣病の人々が「加害者だ」という鹿瀬電工は、阿賀野川の上流新潟県東蒲原郡鹿瀬町にある。猪俣毅町長に話を聞いたら「患者は六十㌔も下流に出ているし、新潟水俣病に対する町の対策などなにもない。国や県が患者を救済すればいいのだ」と言う。まるで他人ごとだ。

住民の間にも「国や県はなんで鹿瀬電工ばかりいじめるのか」と、同情論が多い。「電工はおらが工場だ」という工場への帰属意識にささえられた同情である。

新潟は北陸一の臨海工業地帯。帝国石油、日本石油、日本ガス化学、東洋ガス化学、信越化学、日本鋼管、日本軽金属などの工場が群立している。現在従業員約六百人の鹿瀬電工は、新潟県ではほど大きい工場とは言えない。しかし、鹿瀬町という狭い地域社会の中ではちょっとワケが違う。

工場の創立は昭和三年。いまでこそ従業員は企業合理化で六百人に減り、昭和電工の子会社に落ちたが、数年前までは三千人を越え、名前も〝昭和電工鹿瀬工場〟であった。工場が納める固定資産税や従業員の住民税が町の自主財源の大半を占めていた。

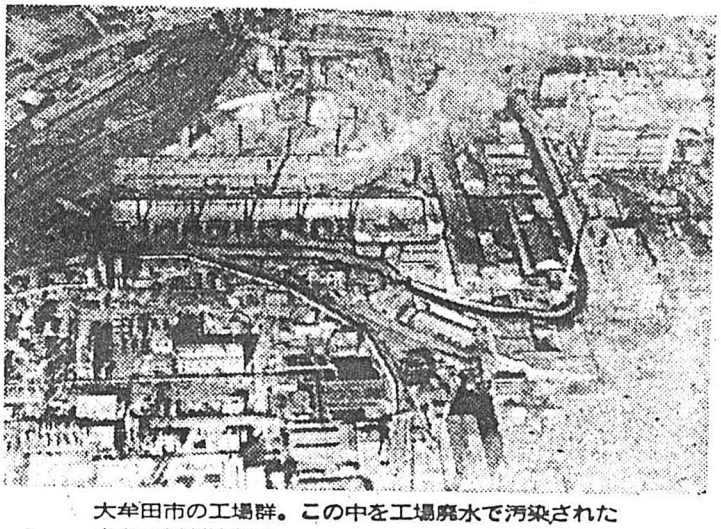
住民の中には「昭電さんにお世話になった」と、恩義を感じている人が多い。農家の耕作面積は、一戸平均五〇㌃そこそこしかない。しかし工場が出来てから、住民は東京まで出かせぎに行かなくてすむようになった。

昭電の従業員になることは、この地域では非常な名誉だった。〝従業員〟とは〝工員〟のことで、ホワイトカラーの職員ではない。しかし貧しい農家にとって、確実な現金収入は貴重だった。

工員になるには、まず臨時人夫として採用され、働きが良ければ指定人夫となり、さらに準工員、工員と階段を上るのだが、工員になれば住民が尊敬のまなざしで見た。

こんな地元住民と工場の関係の中で、もし新潟水俣病の患者が鹿瀬町で発生していたら、患者たちは工場に向かって活発な発言をしたであろうか。おそらく水俣市の患者と同じく、あるいはそれ以上に従順な〝無告の民〟となったのではあるまいか。

新潟県主団体水俣病対策会議が問題を法廷に持ち込んでまで工場に抵抗しているのは、一つには患者の発生した新潟市一日市(ひといち)地区その他と鹿瀬町との行政区域が違うからだといわれている。新潟では、工場と患者との間に上下の関係がない。だから患者は工場に、遠慮なくモノが言える。だれかが厳重に監視していないと〝公害〟という名の怪獣は、大手を振って市民社会をまかり通り、善良で無防備な市民をあくとなくいけにえにする。ことに、加害者である工場がその地域に君臨するとき、市民はさらに無防備となり、加害者への怒りを口にしなくなる。



大牟田市の工場群。この中を工場廃水で汚染された大牟田川が流れる